

2020年11月30日発行

忘れられない言葉



1960年東山荘の夏期講習会記念写真

三浦 安子

1958年の秋、私は初めて今井館を訪ねました。当時、矢内原忠雄先生が今井館で日曜集会を開いておられました。その頃私が在寮していた大学の女子寮の管理人でいらっしゃった藤井偕子さん（矢内原恵子夫人の姪に当たる方）が、私を今井館に誘って下さったのです。当時の矢内原先生の集会は聴講者が多く、藤井さんも私も玄関に立って聴講しました。

1960年、御殿場の東山荘での夏期講習

で「ロマ書」の講義を伺ったのが、矢内原先生から本当にお教えを受けた時といえます。60年安保闘争の嵐に翻弄されて激しく悩んだ直後のことでした。翌1961年6月に矢内原先生は、目黒区駒場の東大教養学部の九大教室で、「人生の選択」という講演をして下さいました。「私達は自分の進路を自分で選択したつもりでいるが、実は神様からその道へと選ばれているのです」というお話で、深い感銘を受けました。その日、私は駒場の柏蔭舎聖書研究会でご指導を受けていた西村秀夫先生のご依頼で、九大教室の講壇脇の楽屋で、矢内原先生のお話を筆記していました。講演を終えられた先生は、私が鉛筆を走らせていた楽屋へ戻ってこられて、「ご苦労さま。筆記して下さいましたね。有難う」とねぎらって下さいました。その半年後、矢内原先生は帰天されました。あれから59年たちます。大学紛争、神戸大震災、東日本大震災、原発事故、そして私達は今コロナ禍の只中にいます。

1957年の東大の入学式で矢内原先生は「ここで学ぶ諸君は、社会に貢献する責任があります」と訓示されましたが、この厳しい総長告辞と共に、あのねぎらいのお言葉は今も忘れられません。矢内原先生のお言葉を想起するたびに、不安と悲しみの多い現代にあって、これまでの主のお守りへの感謝とともに、自分は少しでも「社会に役立つこと」をしているだろうかと自問せずにはられません。

目次

表紙・巻頭言

目次・内村鑑三の言葉

表紙について・発行趣旨…………… 2	学校・学寮便り…………… 8
今井館新築移転事業の進捗状況…………… 3	各地からの報告…………… 11
「高橋三郎召天10周年記念キリスト教講演会」 報告…………… 5	定期集会・地域別特別集会等…………… 14
『今井館ニュース』編集を退任するに 当たって…………… 7	事務局便り…………… 17
	維持会員募集のお知らせ・編集後記…………… 18

内村鑑三の言葉

書簡の中から

(三浦政治宛、1929年1月18日)

誠に悪い世の中でありまして、悪い者は官吏、教育家に限りません。聞く事、見る事、悉く憤慨の種であります。然し十字架を仰いで、其処に平安があるのであります。其他には何処にもありません。キリストの僕にして、此の世に在りて所詮順境に在る者は、一人も無いと思ひます。此真理を知りてこそ、暗き世に在りて光の道を歩み得るのであります。

『内村鑑三日記書簡全集』8巻、教文館、1965年

(選：NPO法人今井館教友会相談役 大山綱夫)

(選者注：三浦は北海道僻地でアイヌ児童の教育に生きた。「古来 北海道全土を我がものとせしアイヌ族を虐げたりし シャモ(=和人)全部の身代わりとして 小生も彼等によって死することいささか本懐の至りに御座候」との言葉を遺した。)

○表紙について

今号の巻頭言は、三浦安子さんが矢内原集会の思い出をご寄稿くださった。若き日に矢内原から聴いた言葉をこれまで大切に抱えて来られたことを記された。写真は1960年矢内原忠雄夏期(ロマ書)講習会(於御殿場東山荘)参加者集合写真。参加者はおおよそ200名で、男子と女子はほぼ半々。記念写真は先生を中央にして、男女別々に撮影した4枚のうちの1枚。前列中央が矢内原、最後列向かって左から3番目が筆者。(C. Y.)

『今井館ニュース』発行趣旨

NPO法人今井館教友会は、キリスト教の精神に基づいて、今井館を維持・管理・運営し、内村鑑三(無教会の提唱者)及び彼につらなる者たちの広範かつ多面的な思想と活動を自ら調査・研究するとともに、他の個人と団体による調査・研究をも奨励・支援し、それら自他の調査・研究成果の社会一般への普及に努めて、正義と隣人愛を基調とする平和的な社会の形成と発展に寄与することを目的とする(定款第3条)。その目的を達成するため、特定非営利活動に係る事業として今井館ニュース発行を通じ「内村鑑三及び彼に連なる人々の思想と活動を調査・研究・発表する事業」を行うものとする(定款第5条3項)。